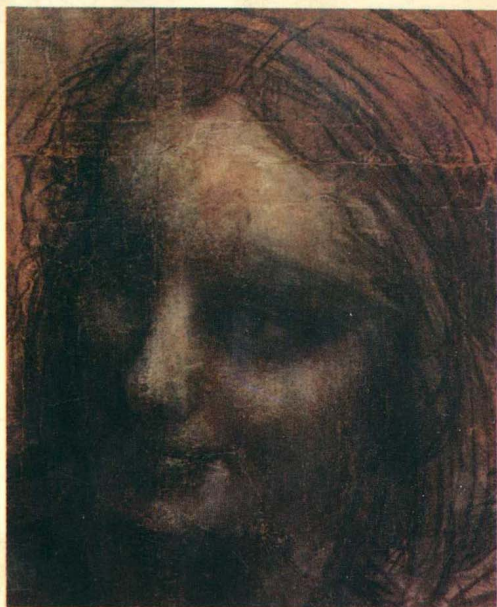


ユキの日記

病める少女の20年

笠原 嘉 編



みすず書房

ユキの日記

病める少女の 20 年

笠 原 嘉 編

みすず書房

ユキの日記

笠原 嘉 編

1978 年 11 月 17 日 印刷

1978 年 11 月 27 日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 3 丁目 17-15

電話 814-0131 (営業) 815-9181 (本社) 振替 東京 0-195132

本文印刷所 新興印刷

扉・口絵・表紙・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

© 1978 Misuzu Shobo

Printed in Japan

書籍コード 0047-23151-8005

落丁・乱丁本はお取替えいたします

まえがき

ある年、母堂に伴われて病院をおとずれた一人の婦人に会った。残念ながら、二十八歳のこの婦人と私との治療上のおつきあいはごくごく短いものであった。私のしたことといえば、持病の喘息のせいですでに著しく悪化していた彼女の身体への微力な加療と、そして何か月かの後に早くもきた臨終の床を用意したことくらいであった。精神科医としての出番をついに彼女は私にゆるさなかった。小柄で、やせこけていて、化粧気のない、年のわりに老けてみえる、少し頭の大きめの彼女は、私に決して逆いはしなかったものの、それでいてついに一言も心の底から発することのないまま逝った。いつも私の及びうる距離の、少しばかり向うに立っていて、大きな眼でまたたきもせず私の言動をじっと見つめ、私に少なからず職業的無力感を覚えさせながら去っていった。十数年前のことである。

そして次のことがおこるまで、人生のほんの少しの時間で交又したにすぎぬこの婦人が私にとって忘れがたい一人になるうとは、もちろん予想しなかった。彼女の死後、どれくらいしてからであつたらうか、今ははっきり覚えませんが、御母堂からお便りがあって、故人の居室を整理していたら大部の日記帳

が出てきたが、一読する気が私にあるかというお問合せであつた。もちろん喜んでお引受けしたのだが、正直いってその時、その日記をこのような形で今日公刊することになろうとはこれまた予想だにできなかった。失礼ながら精神科医にとつて手記や日記のたぐいの拝読を仰せつかることは、比較的日常的経験に属する。

しかし、拝見しておどろいた。まず第一にその量に、そして第二に決定的にその質に、である。B6判ノートにぎつしり六十冊。発病（二十歳）をはるかさかのぼる八歳当時から発病後一年余（二十一歳）の時点まで。病人のものする日記はふつう、発病の後からか、せいぜい発病の直前あたりからで、しかもしばしば断片的であつたり判読しがたい部分を少なからず含むことが多い。発病という悲劇のクライマックスへといたる長い長い道程を、ほとんど毎日、しかもこれほど克明に、これほど冷静に書きつづつたノートを、私自身は寡聞にして知らない。もちろん喘息という彼女の宿痾がなかったら、つまりベツドですぐすことを余儀なくされる時間をこれほど長くもつことがなかったら、彼女とてこのノートをのこしはしなかったに違いない。学校生活を継続することができ、同年輩の友人と交流する機会を少しでも与えられていたら、彼女とてこれほどまで入念に日記を仕上げなかったに違いない。

気軽にお借りしたつもりの日記帳にいつしか私の方が没頭し、やりかけていた仕事をしばらく傍におかざるをえなくなつた。その気持は読者にお察しいただけるのではないかと思う。ともあれ、彼女が生前に私に示したあの無表情、燃えつきたかのごとき印象とは、これはまたあまりにもうらはらの世界であつた。優に一つの作品というに価すると私は思った。

何度か通読ののち、何らかの形でこれを専門家ならびに御関係の方々の一覽に供したいという思いをおさえられなくなつた私は、勇を鼓して御家族にその可能性について打診し、そして快諾をえた。薄幸

な彼女のために、また精神医学へのいささかの寄与のために、と御母堂は御家族を代表しておっしゃって下さった。これが本書出版の機縁である。

しかし、その時から実はもう十年がたつ。一つには抜粋をつくるというはじめての仕事に私が暇だったからである。六十冊を約十分の一にしたことになろうか。こういう場合、編者好みの個所が多く採用されることは或る程度止むをえないだろうが、できればそうしなくなかったから、何人かの同僚に意見をきいたり、御母堂に再三にわたって御校閲をねがったりした。そうしているうちに、いつか十年がたった。

だが、十年をついやした今一つの、より大きな理由は、彼女の死後十分に時間のたつことが、こういった作業の場合、必要であろうと考えたことにある。なぜなら、ともすればプライバシーの侵害につながりかねない作業である以上、私どもの一時の感傷による行為でないことを、くりかえし点検するため時間がいると考えたからである。十年後の今日、編者がこの日記についても感慨と、この出版の意義についてもつ見解は十年前とかわっていない。御家族もこの十年の間に出版について、促しこそあれ、逡巡を示されることは全くなかった。

十分に全日記を要約しえたという自信はないが、これをもって諒とされるよう、幽明をわけた彼女に願う次第である。日記中には随所に小文字で、前後関係をあきらかにするのに必要なコメントを挿入した。その多くは御母堂の助力をえている。日記中一部が消失している。これは紛失というよりは、彼女自身がその部分だけを焼却したと思われるふしがある。理由はわからない。また急性期中の手記がないのは止むをえないとして、発病後一年余の時点から後の日記が見出されないのも残念である。書かれなかったのか、棄却されたのか、散逸したのか。この文才をもって病中の記録がつくられておれば、われ

われが教えられるところ少なくなかったと思うのであるが。しかし、さいわい御母堂もまた御自分の日記をつけておられたから読者にこの日記をよんでいただく上で必要と思える事柄についての記録をそこから拝借し、何カ所かに挿入させていただくことができた。

当然のことながら、地名、人名、職業名等は匿名性をたもつため、すべて念入りに変更してある。しかし、読者にここでお願ひしておこう。この、すでに地上をさって十年になる彼女の地上的「誰」について無用の詮索をなさらないで下さることを、編者としてはあらためて読者にお願ひしておこう。ユキはいま貴方のすぐ側にいる病人の一人である。それ以外の誰でもない。

日記は彼女の八歳九カ月の時点からはじまる。読者をそこへといざなうために、その時点までの彼女の生活史をかんとんにしるすことからはじめよう。

目 次

まえがき	1
1 日記以前	7
2 大空しゅうの夜のこと	10
3 ひゅうひゅう始まる	14
4 なぜ神様は	24
5 親愛なる友へ!	37
6 ああ メニユヒン!	56
7 「お母様、お母様、お母様……」	70
8 クルト・ウェス氏の手	118
9 アメリカ人の神父様たち	152
10 ひと気なし	193
11 私のすべて Hさんの出現	236
12 入院、退院、そして入院	280
あとがき	329
8 歳9 月～9 歳10 月	
9 歳11 月～11 歳2 月	
11 歳4 月～13 歳2 月	
13 歳2 月～14 歳2 月	
14 歳2 月～15 歳2 月	
15 歳2 月～16 歳2 月	
16 歳2 月～17 歳2 月	
17 歳2 月～18 歳2 月	
18 歳2 月～19 歳2 月	
19 歳2 月～20 歳2 月	
20 歳2 月～21 歳	

ユキ。一男三女のうちの三女。上からいうと長女テル、次女マギ、三女ユキ、長男ピート。四児の年齢間隔はほぼ一年半から二年。

父親は大企業勤務のエンヂニア。三男二女の二男。短気だが、エネルギーがあり、働き者。よく気がつき、こまごまとうごき、人の世話を好む。子供たちを可愛がること人一倍である。反面子供たちが母を占有しすぎることを心よからず思い、この点についてはあからさまに敵意を子供に向ける子供っぽさないしは天真らんまんさも合せもつ。

母親は二人娘の長女。生母を幼時失う。少女期受洗し爾来宗教生活に熱心。信者の夫と見合結婚。抜群の学業成績のゆえに早くから父に「男の子であつたら」といわれ、自らも「男なんかに負けるものか」と頑張り、首席をつづける。大の読書好き。体を動かすことをもって至上とする夫と必ずしも相容れず。

三女ユキの誕生は次女マギの出生後一年五カ月。生来頑強でない母にとって大きな肉体的負担となつたのみならず、第一子より「身代り」的男子を期待していた母にとってユキは生れながらにして歓迎されない子であつた。父親にとつてもまた同様。母乳出ず、人工栄養。十月生れで、しかも当時の居住地が寒冷地であつたため、寝かせたままの授乳多し。

ユキ二年八カ月で長男ビートの誕生。このときのユキの感じたことは、一こと二こと日記中にも出てくる。他の三人が爪かみ、夜尿、極度の人見知りなどによつて母親をこまらせたのに対して、ユキだけは何らの問題もなく、手のかからない従順そのものの子であつた。しかしどことなく虚弱なところがあつた。

ユキ三年四カ月、ビート六カ月の際母に結婚生活上の危機がくる。四人の幼い子供の存在が思いとどまらせる。爾来彼女の不安定を支えたのはその折々に親切にくれた異国人の神父たちであつた。

ユキ五年六カ月、ビート二年八カ月、母咯血し、入院。戦時下四人の子供は二人ずつ二組にわかれ親戚をあちらこちらとタライまわしにされる。どこへいってもユキは、ききわけのよい子、骨身をおしまず働く、よい子としてほめちぎられる。一年後一族再会。

ユキの小学校生活。勤労奉仕が多く、勉強時間が少なかった。運動が不得手。頭囲が大きく、走るとか飛ぶとかが不得手であつた。あまり学校が好きではなかったが、姉や姉たちの友だちと別の自分の友だちをもつて喜んでゐた。

宗教教育と聖歌の練習に教会に通つてゐた。きびしい神父で他の子供たちはよくたたかれたのに、ユキに対してはその神父も声をあげることさえしなかった。しかしユキは友人たちのうける罰にいつも感応してゐたようにみえた。

日記のはじまる時点での家族の年齢。父（42歳）、母（35歳）、長女テル（12歳）、次女マギ（10歳）、三女ユキ（8歳）、長男ビート（6歳）。

2 大空しゅうの夜のこと

8歳9カ月〜9歳10カ月

一九四五年（昭和二十年）

七月九日の晩、大空しゅうがありました。一ねむりするとサイレンがなりだしたのでぼうくうごうへ入りました。そこで洋服に着かえました。ごろんごろんに着ました。ろうそくをつけていました。戸がしまっていましたけれどもけむいでした。お母様もお父様も火を消しにいったので、お母様が死にはしないかと思っしてしんぱいでした。お父様が「おかあさあん、おかあさあん」と呼んでいました。ぼうくうごうの中にさいだんがあったので、そちらの方を見て、お母様が死にませんように、ほかの人たちも死にませんようにおいのりしました。うちがやけるとは思わなかったのです。そのためにはおいのりをしませんでした。

しょういだんが大雨がふるような音をたててふってくる音がしました。そのうちにお母様が「出ていらっしゃい」といった時、マジはあわててろうそくを消してしまいましたので、ピートは「クツがない」「ぼうしがおちた」「足をふまれた」と大さわぎでした。そしてようやく出ました。もちろんぼうくうご

うはだいいょうぶだと思ってなにもたないで出ました。私は朝日ぐつをはいて出ました。おふろばに入って、くつのまんまおふろの中に入ってからだをぬらしました。おうせつまがまっかになっていました。

家の前のテニスコートへ行くと大勢いました。井上さんのところはまるやけでした。小さい子は自分のおもちゃを出していました。私の家はくずれて火がぼうぼうたっていました。朝になってもまだもえていたので、洋服のぬれていたのをかわかしました。太陽はまぶしくないのでした。かき色でまんまるでした。朝はくうしゅうでやけたじゃがいもをたべました。ピートは「ああ、もうこれで戦争すんだの？」とききますと、お母様は「まだまだ、二十年も三十年もつづくよ」といいました。（十月十七日）

焼け跡にバラックを建てて住んだ。十月に入ってわら半紙のうすいノートが配給になったので、御母堂が「日記をつけておいたら？」といったのがきっかけではじまったのだという。この一冊目などは無地だったのでたねんに野をひいて余白なしにぎっしり書いている。

十月二十三日

今日は私のおたんじょう日です。私がチョコレートをごちそうしました。九月に東京でお父様がもらってきたのを、ほかの人はぜんぶたべてしまいましたが。今日までずっと私一人がとつといたのです。みんな私のたんじょう日をまいました。チョコレートがあるからです。ほんのちよびりずつわけました。けれどもみんながよろこんでくださったので十ずつたべたようなきがしました。お母様は「このチョコレートはユキが、みんながたべている時たべないでとつといたのです。よくぎせいをしましたね。」

それからユキ、おめでとう、とてもあまいでした。ごちそうさま」といつてくださいました。おさつのつぶしたおだんごをつくってくださいました。とてもおいしいでした。みているとよだれがたれそうでした。たべてみるとほったがおちてしまったようなきがしました。とてもおいしいでした。

十月三十日

今日は学校でさぎょうでした。石はこびでした。「十かいはこびなさい」と先生がおっしゃいました。「よいどん！」というがはいか石をとってはこびました。学校のぼうくうごうをうめるのです。みんなはあはいってやりました。先生は立つてみていました。とうとう私が一とうになりました。みんな私に向って「ばんざあい、ユキさん」といつてくれました。先生が「きをつけ」とおっしゃったとき、私は思わず「あゝあ」といつてしまいました。とてもつかれてしまいました。うちへかえったらすこしねつが出ました。

三月一日

いつも大阪のことを考え、しゃべっています。大阪へ行くようにをしはじめました。私はザイサンをかたづけました。行く前に先生とお友だちにおわかれをします。大阪へ行ってからおたがいにお手紙を書きます。おしてまたいつかおめにかかりたいと思っています。それだけかなえられたら私はほんとうにうれいいます。もううれしくてうれしくてたまりません。

六月十二日

今日学校で私が遊んでいると「おすそもち！」といったので、私は逃げてやったら「おひめ様がお逃げになった」といつてほんとにおもしろいでした。「へびが落ちてくる」とか「けむしが落ちてくる」

とかいってあそびました。とてもとても今日はおもしろいでした。

九月三日

今日副きゅうちようを女のなかでせんきょをしました。それは私でした。私は大喜びでうちへかえりました。私は「ベッテ」というあだな（とてもかわいくてみんなから愛されている女の子の名）でかわいがられていました。西尾さんに「雪の王女」をかってもらいました。

九月四日

私は一ばん前にならんでちようれいをしたので、先生方も「じろじろ」と見ていてとてもやさしいでした。

三月十日大阪へ移る。やけ残った大阪城、あちこちの教会、はじめて見る劇映画の数々、児童劇、アメリカ人とのやりとり、「うれしくてうれしくてたまりません」何もかもめずらしく、何もかも楽しく生き生きと生活している。このように明るく朗かに、喜びにみちた歳月を彼女がもっていたということは、この日記がなかったら今日想像できなかったであろう。

9歳 11カ月 11歳 2カ月

一九四六年十月四日

九月二十六日に神戸へ家をかかりました。家の前は石だんなので、荷物をどんどんとはこんであせが出て、てぬぐいもハンケチも荷物の中なのであせをふかないでいたので風をひいてしまったのだそうです。

テルとマギは九月三十日から学校へ行っています。私はかぜをひいて行けません。昼間はせきが出ないで、夜になるとゴホンゴホンとでるので、昼間たいせつにしなければなりません。お母様が「夜ねれなかったのだから昼間のうちにねなさい」とおっしゃったのでお昼ねをしました。

風がすっかりよくなったならレイスイマサツをやることにきめてあります。松はかぜによいそうですから、ここはとてまたくさんの松があるからうれしいです。きょねんもおととしもかぜを一ぺんもひきませんでした。空しゅうで焼け、バラックではかぜがひゅうひゅうと入ってきますがだいじょうぶでした。空しゅうで心がはりきっていたからだそうです。少しだけひゅうひゅういっているときは△をつけ、ひ